

# 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて —キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査 2018 年—

紺谷 亮一 ノートルダム清心女子大学文学部教授  
 山口 雄治 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教  
 下釜 和也 古代オリエント博物館研究員  
 フィクリ・クラックオウル アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

## Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Northern Trench, Kültepe, Turkey (2018)

KONTANI, Ryoichi Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University  
 YAMAGUCHI, Yuji Assistant professor, Archaeological Research Center, Okayama University  
 SHIMOGAMA, Kazuya Associate curator, The Ancient Orient Museum  
 KULAKOĞLU, Fikri Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

### 1. はじめに

キュルテペ遺跡北辺に設定した北トレンチの発掘調査は今年度で4シーズン目を迎える(図1)。この北トレンチ(10×10 mのグリッド)を設定した目的は、未だ解明されていないキュルテペ遺跡における前期青銅器時代以前の文化編年を構築することである。また、この作業は前2千年紀前半に、大きな文化的繁栄を迎えた古代都市カニシュの起源を探る事にも繋がる。

昨年度に引き続き、2018年8月4日~9月18日まで、発掘調査を行った。今年度は北トレンチ北東部を4分割して調査した。ここでは、それらを暫定的に1区、2区、3区、4区としておく(図2)。

### 2. 2区の調査：地下水位下の遺構の発見

北トレンチの北東隅に設定した深掘試掘溝(2区)をさらに掘削し、前期青銅器時代以前の層序を調査した。ここでは、昨年、第XIV層に属する東西石列が確認されていた。調査時は地下水位が高く、この石列は完全に水面下に隠れる状態であった。その為、この水を汲み出すのに想像以上に時間がかかった。結果的に、石列下を僅かではあるが、掘削することができた。

掘削時の覆土は非常に粘性が強く、遺物点数は比較的少なかった。だが、第XIV層東西石列下約50 cm(地表下約6 m)で、南北方向に日干レンガ壁の目地を確認することができた(図3)。そこで、これを第XV

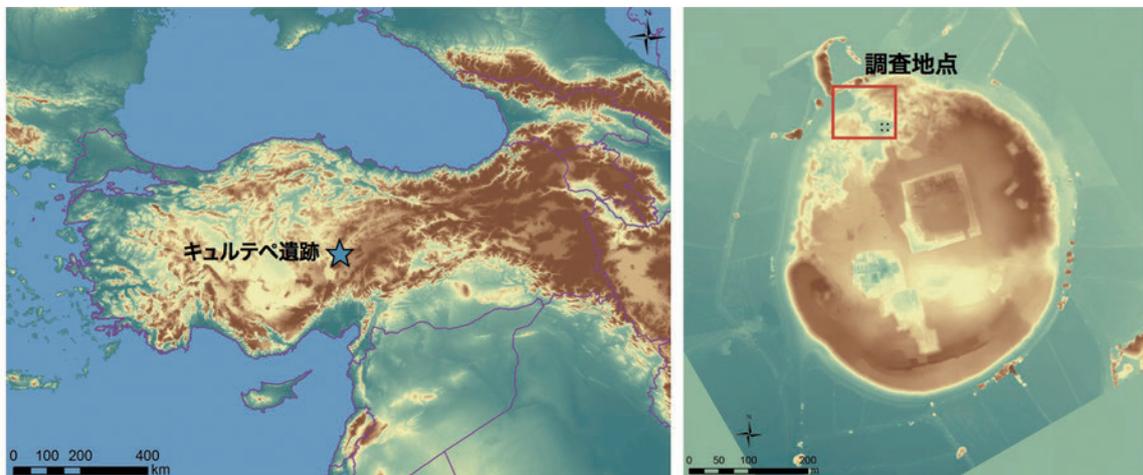


図1 キュルテペ遺跡の位置と遺跡地形測量図・調査地点  
 (左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐弐氏作成)



図2 北トレンチ発掘調査地点区割り

層と認定した。この層に伴う土器として赤黒土器片、黒色磨研土器片が少数出土した。特に、赤黒土器片中には小型の浅鉢形を呈し、器壁が薄く、表面、内面が丁寧に磨研されたものが見られた。

これに類似した赤黒土器は、我々が2008～2013年にかけて行った、カイセリ県内における遺跡分布調査(KAYAP)においても確認している。表採資料の赤黒土器の胎土の放射性炭素年代測定を実施したところ、暫定的ではあるが前4千年紀中頃の数値が得られている(Sudo et al. 2017)。このことから、第XV層が、既に後期銅石器時代に到達している可能性が高くなってきた。第XV層に属する年代測定は現在進行中であり、結果が非常に注目される。

ここで、地下水とこの遺構との関係に触れておきたい。第XV層の日干しレンガ壁が地下水位下約1mで確認されており、未だキュルテペ遺跡の基盤層に到達していないことを示している。また、上層の第XI層では厚さ15cmの砂礫層が確認されている。当時の地下水位は不明確ではあるものの、北トレンチにおける居住地は比較的低位部であったことが示唆される。

### 3. 1区の調査

#### 3.1 第X層南北壁の内外面を精査

本区画は、2区の西側にあたる。昨年度の発掘で第X層に属する幅1.5mを超える石積み+粘土張の南北壁体が確認された。この壁の東側面は厚さ10cmの粘土で塗られている。本年度は南北壁の東西、どちらが部屋の内外面であるかが調査課題の一つとなった。



図3 XV層検出日干しレンガ壁の目地



図4 VIII層ピット出土土器

2区は多数のピットにより攪乱されていたため、南北壁西側表面には、昨年確認された東側面のような粘土張は確認できなかった。この為、当課題を解明するには、発掘区を拡充して、南北石列の続きを確認する必要がある。

#### 3.2 3点セットの完形土器が出土

第X層に到達する過程で、第VIII層に属する発掘区北側セクションにかかる径2mのピットを確認した。このピット内から、赤色磨研された把手付注口土器、片把手付壺、穿孔摘み把手付椀の計3点が出土した(図4)。これらは、ミニチュア土器で、ピット内に一括して破棄されたと考えられる。

### 4. 3区の調査：ピットを確認

この発掘区は2016年までの段階で、既に第VIII層まで掘り下げられていた。本年度は上記の第X層を拡充する為に再発掘した。最終的には、第IX層まで掘り下げた。西側セクションにかかる形で径約2mのピットが確認された。ピット内の埋土には大量の灰が含まれていた。また、発掘区東側には半掘する形で、ピット



図5 土器溜まり

トを掘削した。当初は窯状遺構ではないかと考えられたが、覆土は焼土で満たされ、遺物等は極端に少なかった。

#### 5. 4区の調査：土器溜まりを確認

この区画では第Ⅷ層において広範囲にわたる焼土が確認されていた。その西側を掘り下げたところ、幅約1.5mの範囲で土器溜まりが確認された(図5)。注目されるのは土器片が数百点にのぼるのにも関わらず、接合できる点数が少ない点である。これは、廃棄された土器が多種にわたる可能性を示唆している。土鈴と考えられる把手付土器、北シリアからの搬入土器片、また、貝製装身具(図6)、大理石製円盤が出土した。

### 6. 中央アナトリアにおける銅石器時代

中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代研究は、アリシャルホユック遺跡の調査以後、劇的に進展しているとは言い難い。近年では、チャドルホユック遺跡などの調査によって部分的にその内容が明らかになっているものの、西アナトリアや東アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代編年との相対化は未だ困難な状況にある。キュルテペ遺跡の位置するカイセリ県では、銅石器時代の遺跡数は少なく、その規模も小さいものとなっており、また単層の遺跡が非常に多い(Kontani et al. 2014)。したがって、当該時期におけるその連続的な様相を明らかにすることが非常に困難なものとなっている。

そうした中であって、キュルテペ遺跡の調査は、銅石器～中期青銅器時代までの連続的な様相を把握するこ



図6 貝製装身具

とができる点に大きな意義がある。今後は、東西アナトリアにおける編年との並行関係を構築し、この時期の一大エポックである都市化のプロセスについて、具体性をもって明らかにできるものと思われる。

なお、今年度の調査は、ノートルダム清心女子大学学内助成金(代表：紺谷亮一)、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号：16H02712、代表：鹿島薫)、同若手研究(B)(課題番号16K16947、代表：下釜和也)、公益財団法人高梨学術奨励基金2018年度若手研究助成(代表：山口雄治)を中心とする研究費によって実施した。

#### ■参考文献

- ・紺谷亮一ほか 2016「中央アナトリアにおける都市の起源を探る—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2015年—」『第23回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、57-62頁。
- ・紺谷亮一ほか 2017「中央アナトリアにおける銅石器時代解明に向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2016年—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、80-85頁。
- ・紺谷亮一ほか 2018「中央アナトリアにおける銅石器時代解明に向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2017年—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、34-38頁。
- ・Kontani, R. et al. 2014 An Archaeological Survey in the Vicinity of Kültepe, Kayseri Province, Turkey, in: L. Atici - F. Kulakoğlu - G. Barjamovic - A. Fairbairn (eds.), Current Research at Kültepe-KANESH: An Interdisciplinary and Integrative Approach to Trade Networks, Internationalism and Identity, 95-106.
- ・Kulakoğlu, K., Kontani, R. et al. forthcoming Preliminary Report of Excavations in the Northern Sector of Kültepe. *Subatu*.
- ・Sudo, H. et al. 2017 An Archaeological Assessment of the Kayseri Province during the Chalcolithic Period: New Evidence from the archaeological Survey Project in Kayseri, Turkey (KAYAP). *Subartu XXXIX*: 227-242.